

## 会津桐材を取り巻く流通・需要の現状

手代木徳弘・長峯秀和・木村憲一郎

福島県林業研究センター

**要旨**：本研究の目的は、文献調査と実地調査とをもとに、桐流通の変遷、市場の動向、必要とされる桐材の規格を明らかにすることである。その結果、以下のことが分かった。流通の変遷では、需要の縮小や輸入材の増大がありながらも取引は継続され、近年では箱材や建材などへの需要が高まっている。市場の動向では、売り上げ材積や売上額は盛期に比べて減少しているものの、ここ数年は販売単価が持ち直し、6万円/m<sup>3</sup>を記録する年もあった。流通・加工業者へのインタビューでは、桐材の需要はフローリングを含めた建材で高く、必要とされる規格は、現状の取引とはやや異なるものの、長さでは2.1m以上、径では36cm以上であった。

**キーワード**：桐材、桐流通、会津桐

### Current status of distribution and demands on Aizu paulownia

Teshirogi Norihiro, Nagamine Hidekazu, Kimura Kenitrou

Fukushima forestry research centre

**Abstract**: The purpose of this study is to clarify the transition of paulownia distribution, market trends, and required material standards based on literature review and field surveys. As a result, in transition of the distribution, trade has continued despite shrinking demand and increase of imports. Moreover, in recent years, new demand was expected for boxes and small goods. In terms of market trends, sales volume and sales amount have decreased compared to peak periods, however unit sale price has recently recovered reaching 60,000 yen/m<sup>3</sup> in some years. It was also found that demand for paulownia wood is high for building materials including flooring, and the required standard is 2.1 m or more in length and 36 cm or more in diameter, differing somewhat from current trade.

**Key-word**: Paulownia material, Paulownia distribution, Aizu Paulownia

### I はじめに

#### 1. 問題意識

福島県会津地方で生産される桐は会津桐と呼ばれ、品質は高く評価され、古くから木履や箆の材料として利用されてきた。福島県内では、年間2万本を超える桐の苗(以下、桐苗という)が植えられた時期もあった(7)。だが、生活様式の変化や輸入材の増加に伴って国内産桐の需要は減少し(6)、会津桐の生産量も減少傾向にある。

田中ら(2019)は、三島町における会津桐生産の動向を調査し、桐の需要は盛期に比べて下回っているものの、町行政を中心に桐苗の栽培が進められているとした。桐の生産は三島町だけでなく、金山町、柳津町、西会津町、喜多方市でも行われ、流通加工業者は三島町以外の市町村でも活動しているという。桐苗の栽培面積を増やそうとする動きもみられ(4)、行政では会津桐の流通や需要

の現状把握が必要とされている。

会津桐に関する文献を2000年以降に限ってみると、福島県立博物館(2002)、田中ら(2019)、岡ら(2020)などがある(2, 5, 6)。だが、その多くは桐の歴史、栽培方法、生産動向が分析の中心となっており、流通や需要の現状は明らかにされていない。

本研究では、主に文献調査と実地調査とをもとに、桐材流通の変遷、市場の動向、必要とされる桐材の規格を明らかにすることを目的とする。なお、本稿では会津桐の立木段階を桐、丸太段階を桐材、製材段階以降を桐製品と定義する。

#### 2. 研究の方法

桐流通の変遷では、熊倉(7)、蔵王タイムス(8)をもとに、昭和期までの国産桐材流通の変遷を分析した。

平成期後半以降の変遷は、福島県桐材組合連合会、会津桐材組合および福島県内の流通・加工業者からの聞き取りにより明らかにした。

市場の動向では、桐市における出材量と価格の動向を調査した。調査対象は、雄勝広域森林組合が開設運営する日本で唯一の桐丸太専門市場（単式市場）である。ここでは毎年6月に土場で入札が行われる。調査は、2016年9月、2018年6月、2019年6月に当該森林組合で行い、過去の販売結果から各年の取引量、平均価格、最高価格、最低価格を整理した。

必要とされる桐材の規格については、県内外の流通・加工業者16者を対象として、2018年6月と2019年9月に聞き取り調査を行った。対象の所在地は県内が8、県外が8である。業種別では流通専門が3、加工専門が7、両方を兼ねるものが6となっている。年間取扱量では流通および流通加工兼業で50m<sup>3</sup>未満が1、50m<sup>3</sup>以上100m<sup>3</sup>未満が2、100m<sup>3</sup>以上200m<sup>3</sup>未満が5、不明が1で、加工専門では10m<sup>3</sup>未満が3、10m<sup>3</sup>以上50m<sup>3</sup>未満が2、400m<sup>3</sup>以上が1、不明が1となっている。調査項目は、国産桐材に占める会津桐材の割合、現在および今後の取り扱い丸太の規格、生産内容、商況、後継者の有無、会津桐材に求めることとした。併せて、自由回答欄を設けた。

## II 結果

### 1. 桐流通の変遷

#### (1) 熊倉国雄の著作より

熊倉（7）によると、徳川時代から明治期にかけての桐材需要量は年間3～5万 m<sup>3</sup>程度あったが、徳川時代に温存された桐の多くは明治期までに切り尽くされ、主産地では桐蓄積がほぼない状態となった。この当時の桐材はほぼ国産である。大正期に入ると需要量はさらに増加し、農商務省統計では1915年には42,804m<sup>3</sup>、1919年には93,275m<sup>3</sup>に達し、国産桐材の割合は74%に低下した。交通の便が整ったこの時期以降、ようやく会津桐の記録が見られるようになる。1940年頃までは7～8万 m<sup>3</sup>の需要が維持されたが、戦時統制経済下に需要量が激減し、1945年には3万 m<sup>3</sup>まで縮小した。その後、1959年には9万 m<sup>3</sup>台に回復したが、1960年頃から木履から箆筒へと需要が変わり、再び年間3万 m<sup>3</sup>台の低い水準となった。

この頃の輸入材の量は3～8千 m<sup>3</sup>とされた。全桐連統計では1968年の消費量は21万 m<sup>3</sup>を記録し、その95%を国産が占めた。その後は国産桐材の供給量が減り、輸入が漸増したため、1973年から3年間の桐材消費量は10万 m<sup>3</sup>を下回った。国産桐材の単価は、1974年に市場最

高値を付けたが、アメリカ材の輸入によってその後下げに転じた。1976年に入ると、消費量は10万 m<sup>3</sup>台に回復し、1979年には204,617m<sup>3</sup>を記録するが、その92%は輸入桐であった。

#### (2) 蔵王タイムスより

桐と木履の業界紙である蔵王タイムス（8）によれば、木履の最盛期は1955年前後までとされた。その後、生活様式の変化によって木履の需要が激減し、家具材特に箆筒に需要の中心が移っていく様子が記されている。これ以降、家具材向けの需要が増加していった。

#### (3) 聞き取り調査結果

福島県桐材組合連合会、会津桐材組合によれば、平成期後半に入り、家具材の需要は減少し、箆筒製造業者および桐材流通業者も激減した。また、2018年の輸入桐を含む消費量のうち国産の割合は数%以下とされた。雄勝広域森林組合が開催する桐市に参加した流通関係者8者からも同様の回答があった。転売が繰り返される桐材の正確な流通量の把握は困難だが、2019年の転売分を除いた実数の国産桐材の流通量は全国でおおよそ年間300～500m<sup>3</sup>程度と見込まれるとされた。福島県桐材連合会の1975年1月名簿（1）には全126者の事業者が掲載されているが、2019年の聞き取り調査では現在国産桐材を扱っている事業者はわずか8者となっていた。

福島県内の流通・加工業者によると、需要が増えているのは箱材である。博物館等において国産桐の箱が再評価されていることが影響しているという。また、米櫃や茶筒等の小物の売れ行きも良好で、小物は安定した需要が見込まれ、近年では新たにフローリングを含む建材の需要が高まっているとされた。桐フローリングは、大手住宅メーカーからの引き合いがあるが、発注単位が大きすぎて材料確保が追いつかず、商談が成立していないとする事例も示された。腰板や床板、天井板等では、需要量に対して供給量が少なく、質の良い板材は意匠性の高い高級住宅への利用にとどまっているという。

### 2. 市場の動向

雄勝広域森林組合が開催する桐市が始まったのは1985年であり、2017年までの年間売り上げ材積および売上額を図-1に示す。売り上げ材積は年変動が大きいものの、1998年をピークに減少傾向にあり、2017年には過去最低の材積を記録した。売上額は売り上げ材積にはほぼ比例し、1997年をピークに低下し、2017年に最低の売上額となった。市場担当者によれば、ここ数年は出品する材を集めることが大変で、周辺の蓄積を切り尽くしている現状にあっては、今後の市の存続は難しいとされた。

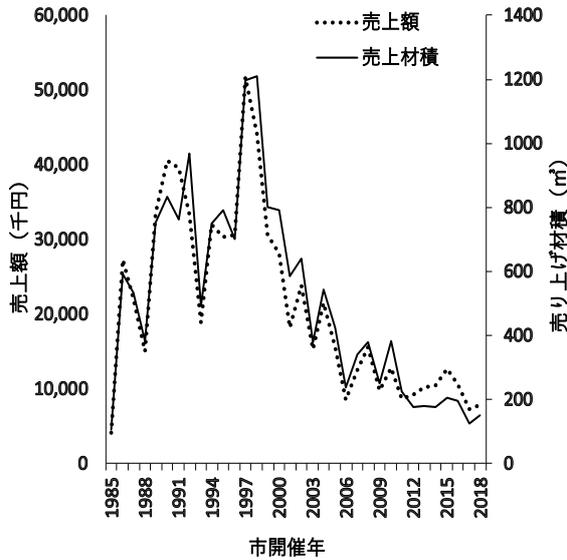


図-1. 雄勝広域森林組合桐市での売上材積と売上額の推移

出展) 雄勝広域森林組合業務資料

注) 売上額と売り上げ材積は1年間の合計

Fig 1. Trends in the volume and value of paulownia sales in Ogachi Wide-Area Forest Owner's Cooperative Associations

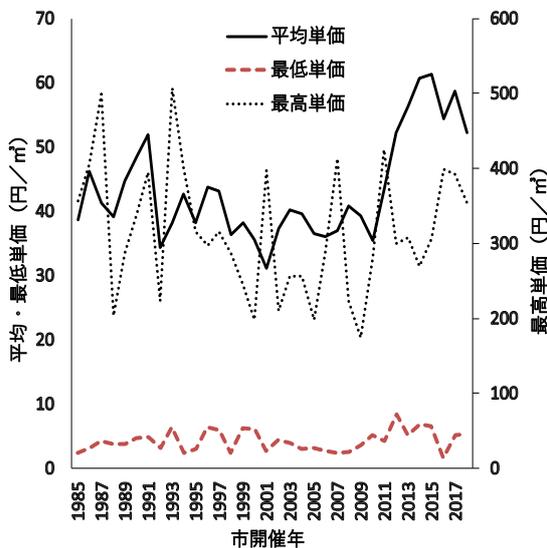


図-2. 雄勝広域森林組合桐市での価格の推移

出展) 雄勝広域森林組合業務資料

注) 単価は売上額を売り上げ材積で割った値

Fig 2. Trends in the volume and value of paulownia sales in Ogachi Wide-Area Forest Owner's Cooperative Associations.

ところで、図-1をより詳しくみると、2013年以降売上額の破線が、売り上げ材積の実線を上回っている。このことは、2013年以降の販売単価の影響によるものと思われることから、同期間の最高、最低、平均の各販売単価の推移を整理した。その結果が図-2である。

最高単価はその都度の出品状況に左右されることから激しく乱高下しているが、およそ20万~50万円/m<sup>3</sup>の範囲で推移し、2012年以降も大きな変化がみられない。次に最低単価は最高単価ほど大きな変化はなく、概ね3~6千円/m<sup>3</sup>で推移している。一方、平均単価は市開催当初から概ね3.5~4万円/m<sup>3</sup>で大きな変動がなかったが、2013年から5万円/m<sup>3</sup>を超え、6万円/m<sup>3</sup>を超える年もあった。平均単価は上昇基調にあり、すなわちこのことが売り上げ材積は少ないながらも、売上額の下げ幅を抑えた要因の一つではないかと考えられる。

### 3. 必要とされる桐材の規格

会津桐材の使用割合に関するインタビューでは、「会津キリの使用割合が80%以上」の回答は県内回答者の88%であった。一方、県外回答者はそのすべてが「10%未満の使用」または「未使用」と回答した。「生産物の種別」で最も回答が多かったのはフローリングを含む建材で、次いで箆笥、小物、箱と続き、種別は多岐にわたった。「会津桐材に求めるもの」で最も多かった回答は、木目の明瞭さと均一さを表す「目」(9者)で、次いで「ブランドイメージ」(8者)、以降「色」「傷のなさ」(各4者)と続き、「固さ」「大きさ」はそれぞれ2者となった。

「商況の見通し」と「後継者」の結果を表-1に示す。「商況の見通し」の内訳では、「下向き」が過半数、「上向き」が1/4、「現状維持」が1/5となった。「上向き」回答者では、すべてが「後継者有り」だった。

取り扱い丸太の長さ、径に関するインタビュー結果を図-3に示す。二重円グラフの内側は、現状の取り扱い丸太の規格、外側は今後希望する丸太の規格である。長さおよび径の区分は、聞き取った桐業界の慣習に基づいて設定している。現状では、長さ2.1m(七尺)以上、径30cm(1尺)以上の取り扱いが多かった。今後の希望では、長さは2.1m以上が多いものの、2.1m未満や4m以上を求める回答者もあった。径では36cm以上を求める回答者が多かった。取扱量400m<sup>3</sup>以上の加工業者は30cm以上と回答したが、箱材であれば単価や歩留まり等を勘案すれば、30cm未満の細ものでも良いとされた。

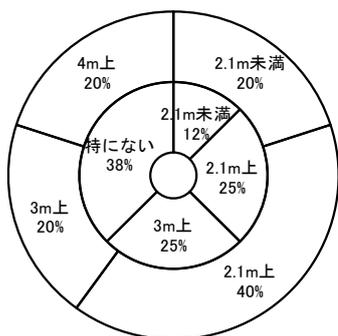
表-1. 商況の見通しと後継者の有無 (2019年インタビュー結果)

Table 1. Perspective of the business trend and successor's existence (2019 year interview result)

商況\後継者	有り	無し	不明	計
上向き	4	0	0	4
現状維持	2	0	1	3
下向き	2	3	3	8
計	8	3	4	15

上向き回答は全て後継者有り 単位：者  
下向き回答の後継者有りは25%

取り扱い丸太の長さ



取り扱い丸太の径

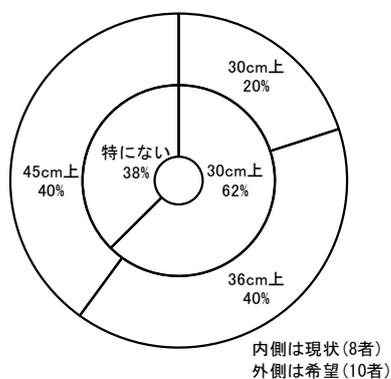


図-3. 現状の取り扱い丸太と今後希望する丸太の規格 (2019インタビュー結果)

Fig.3 The standard of current handling logs and desired logs in the future (results of the interview in 2019)

自由回答では、加工業者からの回答として「国産材下駄生産は日本で数社程度となり、箆筒と琴の用材の在庫が十分で当面需要は無い」「箱材は継続的な需要が見込まれる」、加工業者、流通業者両者から「フローリング、建材は潜在的需要が大きい」との回答があり、需要の変化

とともに、今後、箱材やフローリング需要の増加が示唆される。

### III まとめ

本研究では、文献調査と実地調査とをもとに、桐材流通の変遷、市場の動向、必要とされる桐材の規格を明らかにした。得られた結果を集約する。

桐材の流通では、需要の縮小や輸入材の増大などいくつかの変遷を経ながらも取引は継続され、近年では箱等の原材料や建材などへの需要が高まっていた。

市場の動向では、売り上げ材積や売上額は盛期に比べて減少しているものの、ここ数年は販売単価が持ち直し、6万円/m<sup>3</sup>を記録する年もあった。

必要とされる桐材の規格では、会津桐材の利用割合は福島県内が高く、またフローリングや箆筒、小物、箱等の原材料としてのニーズも高く、木目やブランドイメージに関心が寄せられていた。商況の見通しは、「下向き」が過半を占めたが、後継者の有無に左右されやすかった。丸太の規格は、現状と期待する規格はやや異なり、長さは2.1m以上、径は36cm以上を求める加工業者が多かった。

このように会津桐材には盛期ほどではないものの、連続として底堅い需要があった。国産桐材の販売単価には持ち直しの動きがみられ、フローリングを含めた建材への新たな需要も見込まれている。会津桐の需要に応じていくため、今後は加工業者のニーズに応えた丸太の生産に取り組んでいく必要がある。

### 引用文献

- (1) 福島県桐材組合連合会 (1975) 福島県桐材組合連合会会員名簿
- (2) 福島県立博物館 (2002) 桐の歴史とその性質. 福島県立博物館調査報告第37集 : 1-30
- (3) 福島県林業研究センター (2018) キリ育成技術の確立. 林業研究センター業務報告書 50 : 9-10
- (4) 毎日新聞社 (2020) 福島・桐材生産量 次世代へ技術継承 毎日新聞 2020年9月3日, 東京
- (5) 岡恵介・岡萌樹 (2020) 本当の桐は焼き畑で育った. 東北文化大学総合政策学部紀要 19 (1) : 131-158
- (6) 田中亘・手代木徳弘 (2019) 福島県三島町における会津桐生産の動向. 関東森林研究 70(1) : 13-16
- (7) 熊倉国雄 (1981) 桐栽培総論, 東洋館出版, 東京 : 1-214pp
- (8) 蔵王新聞社 (1953-1956), 蔵王タイムス NO131-252, 昭和28年12月~昭和31年1月, 宮城